

無給で学生たちを教えていた その気概をお尋ねしたい



尾池
守
石巻専修大学長

学問の垣根を越えて 石巻から新たな学びを提案

あけましておめでとうございます。オール専修のみなさまには震災以来、多大なるご支援をいただいております。おかげ様で、石巻も立ち直りつつあります。本年もなにとぞよろしく願いいたします。

石巻専修大学は4月1日に創立30周年を迎えます。その記念式典を9月16日に石巻にて予定しております。現在、石巻では「高大産連携プログラム」を進めています。これは高校、産業界、大学が共同で様々なプログラムに取り組むものです。こちら30周年記念行事の一環として成果を発表いたします。

専修大学の創立の頃に思いを馳せると、当時は日本が鎖国から開国し、世界への扉が開かれた時代かと思えます。4人の創立者の先生方はいち早く世界に出られました。留学先にヨーロッパを選ばず、アメリカに渡ったのはそれなりに理由があると思います。記録によるとアメリカでイギリス、ドイツ、フランスの学問も学ばれたとのこと。アメリカが持っている多様性を重視したのかもしれない。

また、新しいもの、ないしは伝統

を受け継いで新たな国を造ってきたアメリカを選んだのは、4人に「新しい日本を造る」という気概があったからではないでしょうか。しかも「実学を明確に打ち立てよ」という姿勢で、法律と経済のどちらか一方ではなく4人とも両方を学ばれています。4人のうち、お2人は経済がメインで法律を学ばれ、お2人は法律がメインで経済を学ばれました。法体系を整えないと経済は動かないということを確認してらっしゃったのではないのでしょうか。

また田尻稲次郎先生は、経済において、実際に取引をして、利益をあげることを重視していました。そういった意味でも日本の主な貿易国であるアメリカを選んだのかもしれない。

専修学校を創立後、相馬先生以外は大蔵省の官僚をやっていたので、自分の時間を使って教えていたとのこと。しかも最初のうちはお金をもらっておらず、ほぼタダ働きで学生に教えていたようです。もしかすると自分たちのような公務員を育てるつもりで、その見本としてやっていたのかもしれない。どんな気概をもって教えていたのかについて聞いてみたいと思います。

この質問をした時に、もしかしたら答えが1対3に分かれるかなと思

います。相馬先生は銀行に勤めてらっしゃいました。その分、民間の新鮮な視点で教育ができたのではないかと想像します。ほかの3人の方々には、自分の部下になる人を育てようという気持ちがあったのかもしれない。

もし現在、創立者の方々がいらしたなら、石巻に大学をつくったことをどう評価するのかお尋ねしてみたいです。理系も含めた総合大学化ということで、理工学部を持った石巻専修大学について率直な意見をうかがいたい気持ちがあります。私は、ひとつの道だけでなく多様な基盤を作って学ぶことで、社会で役立つ人材になると思っています。私が学長になってからは3つの学部で相互に学べる環境を整えてきました。創立者の方々が学問の垣根を越えて学ばれていらしたので、この点についてご感想をいただきたいですね。

2020年、石巻専修大学は新たに学科の組み合わせを作る構想もあります。すでに持つわれわれの資源、教育分野をうまくつなぎ変えて人材を育てるような学びです。3つの学部が交錯する石巻でこそ学べることがあるはずです。魅力の再発見、再構築、またこれまでの取り組みを広報していきたいと思います。（談）